

# 看護学士課程 1・2 年生の看護基本技術の「活用」を促す 授業形態の構築に関する研究

坂田五月<sup>\*,1)</sup>、篠崎恵美子<sup>1)</sup>、渡邊順子<sup>1)</sup>、藤井徹也<sup>1)</sup>

田島美穂子<sup>2)</sup>、山田弘美<sup>3)</sup>、渡辺昌子<sup>4)</sup>、三浦直子<sup>5)</sup>、吉田千浩<sup>6)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学、<sup>2)</sup>聖隷浜松病院、<sup>3)</sup>聖隷三方原病院、浜松市リハビリテーション病院<sup>4)</sup>、

<sup>5)</sup>浜松医療センター、<sup>6)</sup>浜松労災病院

## 【目的】

本研究では、看護学生の看護基本技術の「活用」を促す授業形態を構築するための検討に必要な基礎的資料を得るために、1 年次から 2 年次への看護基本技術の「活用」状況を縦断的に調査する。

## 【方法】

1. 分散型基礎看護実習 I・II における看護基本技術の「活用」状況を明らかにする。

1) 看護基本技術の「活用」状況を調査する

技術体験表を用いて体験内容を明らかにし、1 年生と 2 年生で体験内容を比較する。

2) 実習記録をもとに実習での学びを可視化する

実習記録の記録内容の文字変換後に数理社テキストマイニングを用いて形態素解析を行い、体験の内容を可視化する。

(1) 分散型基礎看護学実習前後で自分が変わったと思うこと

(2) 実習前後の看護師のイメージの変化

3) 他大学における導入の可能性について検討する

結果を学会発表し、他大学の基礎領域の教員と意見交換し分散型基礎看護学実習の問題点を明らかにする。また過去のデータと比較する。

## 【結果】

1. 分散型基礎看護学実習における体験内容

<ヘルスシステム管理><呼吸管理><排泄管理><栄養支援><薬物管理><検体管理>の全細項目と<創傷管理>の 2 細項目で 1 年生よりも 2 年生の方が、見学率が有意に高く、<バイタルサインの測定>と<一般状態の観察>の実施率が高かった。

2. 分散型基礎看護学実習を通して自分が変わったと思うこと

実習の終わり頃の「自分」は、「看護」の実践場面に「積極的」に参加した体験から理解した「看護師の仕事」をもとに、「こんな看護師になりたいと思う」と感じ「自分」の目指す看護師像を具現化する、という話題単位が抽出された。

3. 分散型基礎看護学実習の前後で変化した看護師のイメージ

学生は実習を通して「看護師同士が協力し合う」場面、看護師が「医師と協力して患者を支える」「他の専門職と情報を共有する」、「家族と連携する」場面を数多く見学していた。そして、一番患者に近い存在の看護師が、個々の患者の「自立」「安全」「安楽」を考えて「判断」をし、必要な「技術」を「看護師同士」協力しながら「提供」する等、実習前には見られなかった話題単位が抽出された。

## 【結論】

1. 1 年生より 2 年生でバイタルサインの測定等の直接的ケアを体験する機会が増す。

2. 分散型基礎看護実習 II の前後で専門職連携のイメージが具現化する。

## 【学会発表の状況】

2013 年 8 月日本看護研究学会（秋田）、2013 年 8 月日本看護教育学会にて発表。